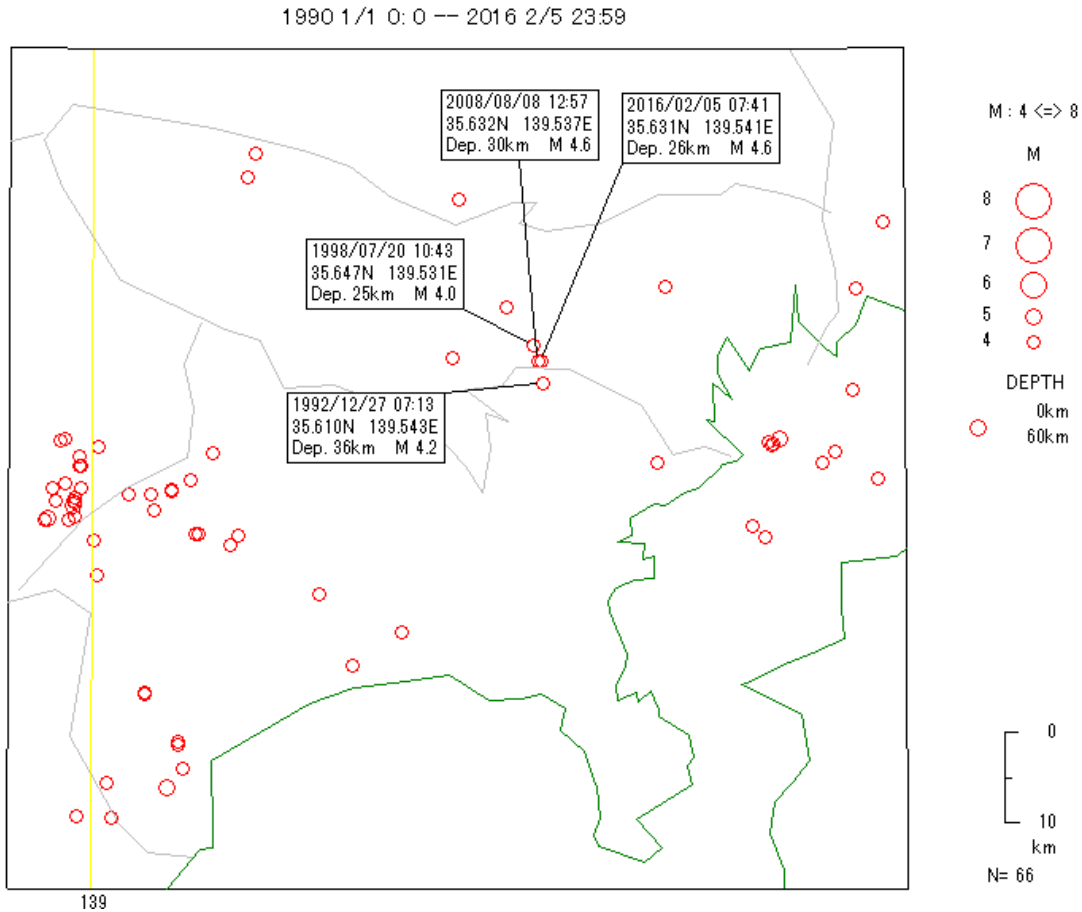


2月5日、7日に首都圏が少し揺れました

2月5日早朝および2月7日に関東地方の一部で震度4を観測する地震が発生しました。7日に茨城県で発生した2件の地震はそれぞれ、地震の巣および311の余震で、通常地震活動です。東京では毎年30回程度の有感地震が発生しますが、この大部分がこのような地震です。

それに対し、2月5日早朝に神奈川県東部（実際の震源地は東京／神奈川境界）で発生した地震のほうが地学的には重要です。



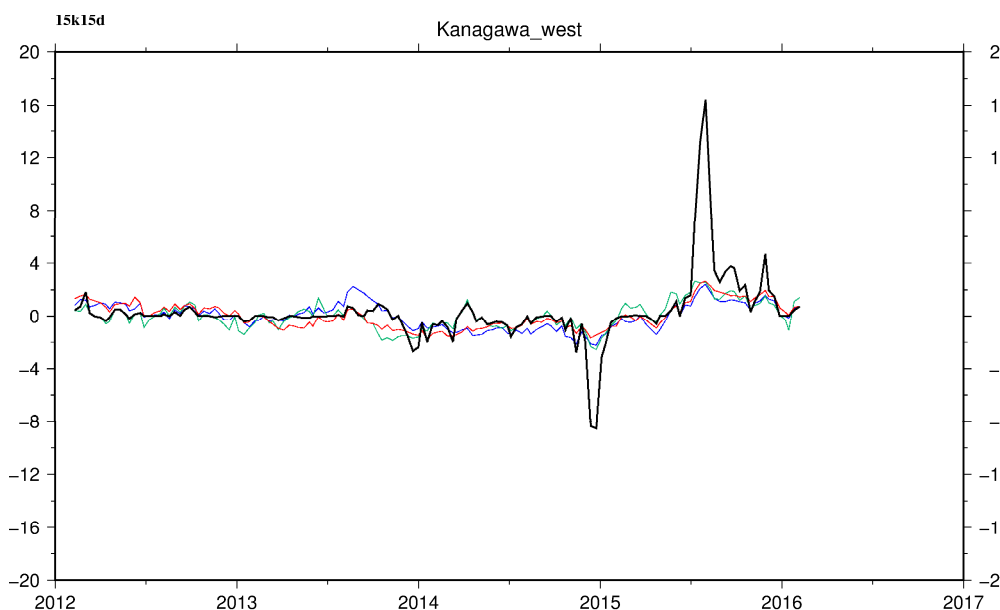
この地域では1992年、1998年、2006年と今回の2016年にマグニチュード4クラスの地震が繰り返し発生しています。ただ今回の地震は沈み込むフィリピン海プレート上面で発生した可能性が高く、過去25年間では最大のものでした。このフィリピン海プレートの上面付近で発生すると考えられているのが、いわゆる「首都圏直下型地震」なのです。「首都圏直下型地震」というのは、特定の断層・地域で発生する地震という訳ではなく、前回の「首都圏直下型地震」は1855年の安政江戸地震です。この地震の震源地は今の江戸川区から浦安市あたりとなっています。

このフィリピン海プレート上面の地震が重要なのは、震源が浅い（<—地表から近い）ためです。2月7日発生した茨城県の地震の一つは深さが50kmほどで発生しました。つまりこれだけ地表から離れているという事になります（25kmと50kmという距離はたとえば阪神大震災の神戸の被害と大阪の被害の違いを考えますと、極めて意味のある距離の差なのです）。

2月5日の神奈川県西部の地震の震源地における地下天気図の時間変化のグラフ

(RTM時系列変化)

今回お見せするのは、5日神奈川県西部地震の震源地付近では、どのように地震活動が変化してきたかという時間変化です。この地域は2011年の東日本大震災で地震活動のパターンが大きく変化してしまったため、2011年7月以降のデータを使って解析しています。



上の図は繰り返しになりますが、2011年以降の比較的短期間の地震活動のゆらぎを示しています。この図からは、いわゆる「神奈川県西部地震」と呼ばれるM7クラスの地震が今後数か月で発生する可能性は極めて低い状況と判断できます。

2月5日と1月1日時点の首都圏の地下天気図

図中の青い部分が地震活動の静穏化という異常の領域です。しかしいずれも面積が小さく、すぐに首都圏直下型地震が発生する可能性はこの解析からはありません。日本では震度5強でもちゃんとした家が倒壊する事はありません。地震予知が出来ても発生は防げませんので、耐震補強をお願いします。

